資　料

武蔵丘短大卒業生の本学入学目的と学生生活の満足度

—卒業生のアンケート調査の中間報告—

蔵原　三雪・太田あや子

On the Survey of the Graduates of Musashigaoka Junior College

—The Interim Report on the Survey—

Miyuki KURAHARA Ayako OTA

Abstract

The purpose of this paper is to clarify our students needs to Musashigaoka College. And we sent our questionnaire, which has 27 items, to the graduates of Musashigaoka Junior College in 1999. In this survey we got the opinions of 466 graduates. The response rate was 30.5%.

This paper is an interim report on the survey.

We examined the results.

1 Many students want to learn the practical knowledge and practical training.

2 Many students want to get the license(teacher's license and dietician license).

3 Many students are satisfied with their college lives and especially they enjoy their campus lives with their many friends.

Key Words : junior college, teacher's license, dietician license

はじめに

18歳人口の減少と高齢化・少子化社会への進行の中で大学への期待も変化しつつある。そうした動きに対応して大学・短大の学科改編やカリキュラムをはじめとする改革が進められつつある。個々の大学・短大においてその学校の行った教育活動を評価する際，在籍中の学生や社会のニーズから見ることは欠くことのできない視点ではあるが，卒業生から見た評価を知ることも将来のあり方を構想する際に重要な示唆を受けることができるだろう。

こうした立場から卒業生達が何を求めて武蔵丘短大に入学し，学校と学生生活の何に満足したかについてアンケートを実施した。本稿ではこの調査の一部について中間報告したい。全体の集計および自由記述やクロス集計あるいは他校との比較を含めた本格的な分析は最終報告に譲りたい。

1　調査の概要と方法

私たちは特色ある教育研究（日本私立学校振興・共済事業団平成10年度私立大学等経常経費補助金特別補助）の一環として，本学卒業生に対して取得した資格，卒業後の就業状況，仕事と本学での実習との関連や学校・学生生活に対する満足度など27項目にわたるアンケート調査を行った。アンケート作成に先立って，様々な進路と職業を選択した卒業生20人に対してインタビュー調査を

行った。また調査票作成に当たって東京女子大学付属比較文化研究所「東京女子大学短期大学部卒業生の就業に関する意識調査」(1986年３月）を参考にさせていただいた。

表１　回答者のプロフィール（返答数466人）

性別	男性	63
	女性	402
	不明	1
専攻	健康・栄養	208
	健康・栄養	254
	不明	4
入学期	１期	58
	２期	89
	３期	85
	４期	78
	５期	102
	６期	45
	不明	9
結婚	未婚	370
	既婚	95
	不明	1

アンケートは健康・栄養専攻第１期から第５期卒業生679人，健康・体育専攻第１期から第６期卒業生848人，合計1527人の卒業生全体を対象とした。回答率は30．５％であった。

調査は1999年３月から８月に郵送方法によって実施した。

返送数466通のうち有効回答数は99．１％であった。

回答者のプロフィールは（総数と回答率）表１のとおりである。

２　アンケート結果に見る回答の傾向

１）何を求めて本学に入学するか（図―１）

入学理由が「健康生活科だから」(１位)，「資格がとれるから」(２位)，「スポーツが続けられるから」(３位）であることに注目したい。「栄養系」「体育系」というよりも「健康生活科」という文字通り，本学の「建学の精神」に対する関心から選んでいる。

また全体で５人に１人強であるが「短期大学だから」(22.5%）も理由としては見落とすことはできない。この内容は１人１人異なるが，「２年間だけ親元を離れることを許してもらった」「４年間で

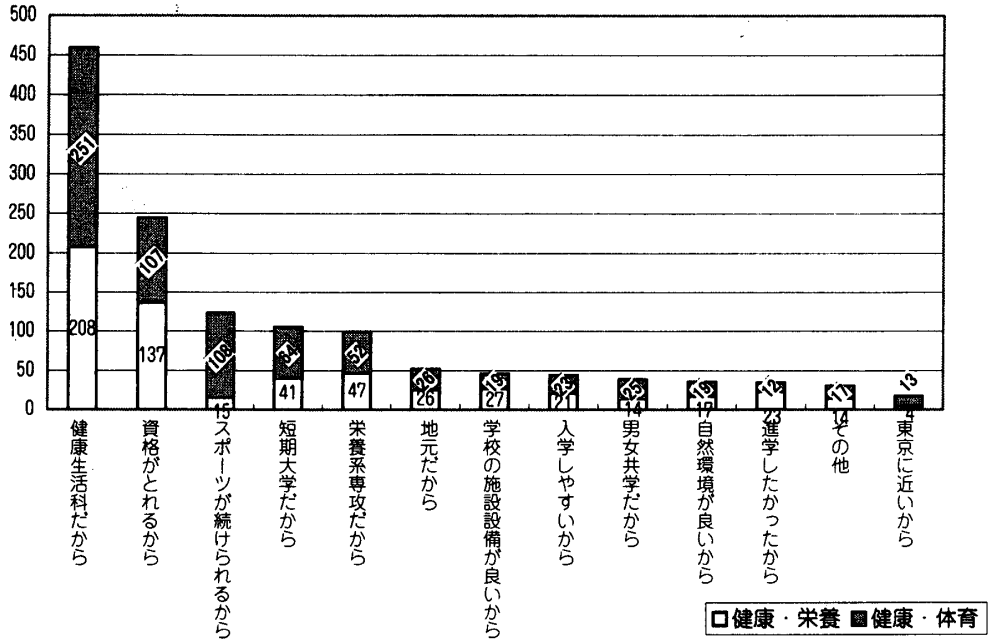

図１　入学理由（複数回答）

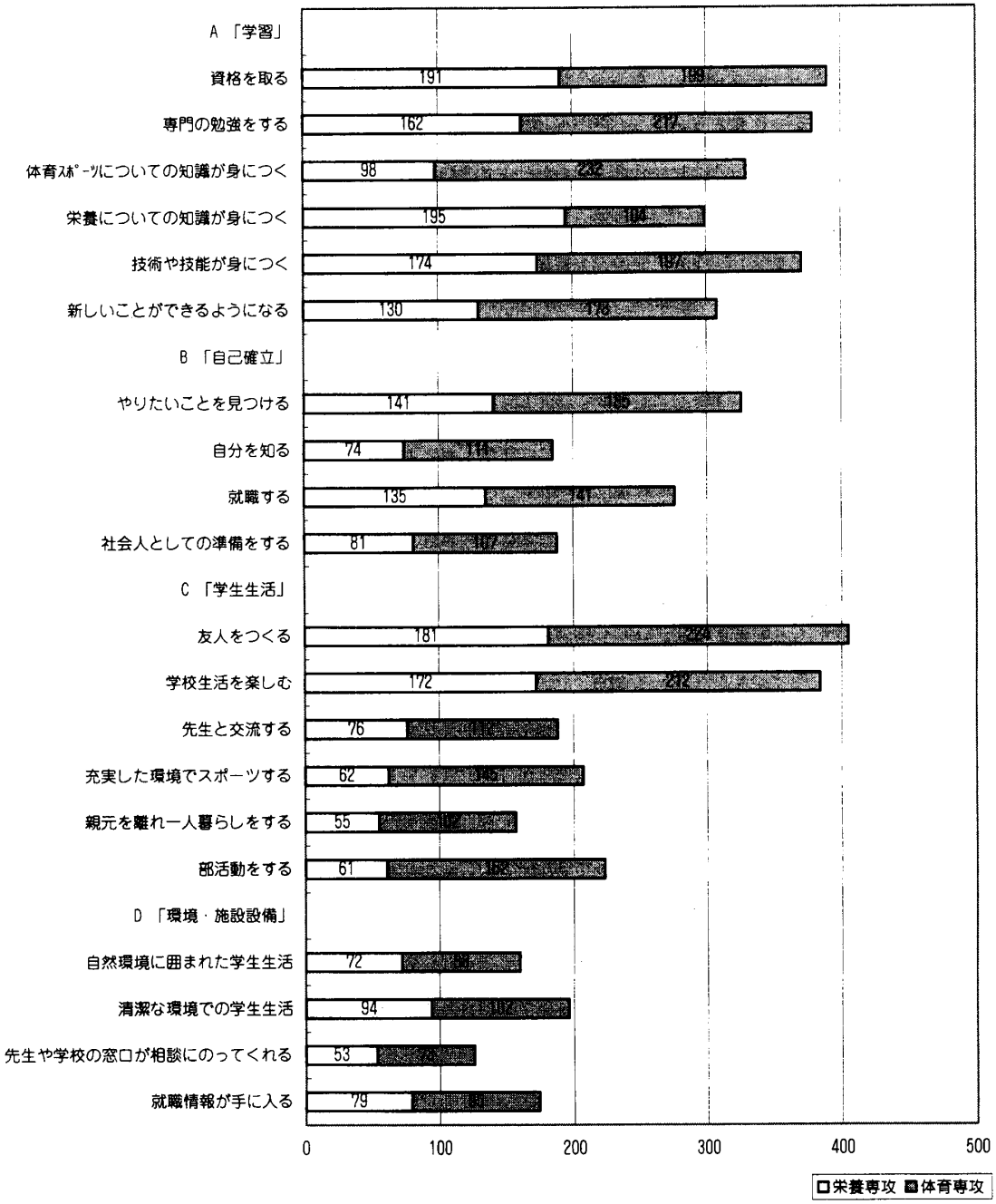

図２　学生生活への期待(「かなり」と「やや」の合計　n=466)

は遊んでしまうので２年間がいいと思った」「経済的に考えて，下にも兄弟がいるので短大にした」などが聞かれる。

２）学生生活に期待していたことは何か（図―２）

こうした入学目的のもとで入学当初，学校生活に期待していたことは何か。これを上位６番目までで見ると次のようである。

(1)　「友人を作る」(86.9%)(小数点２位以下切り捨て)

(2)　「資格を取る」(83.6%)

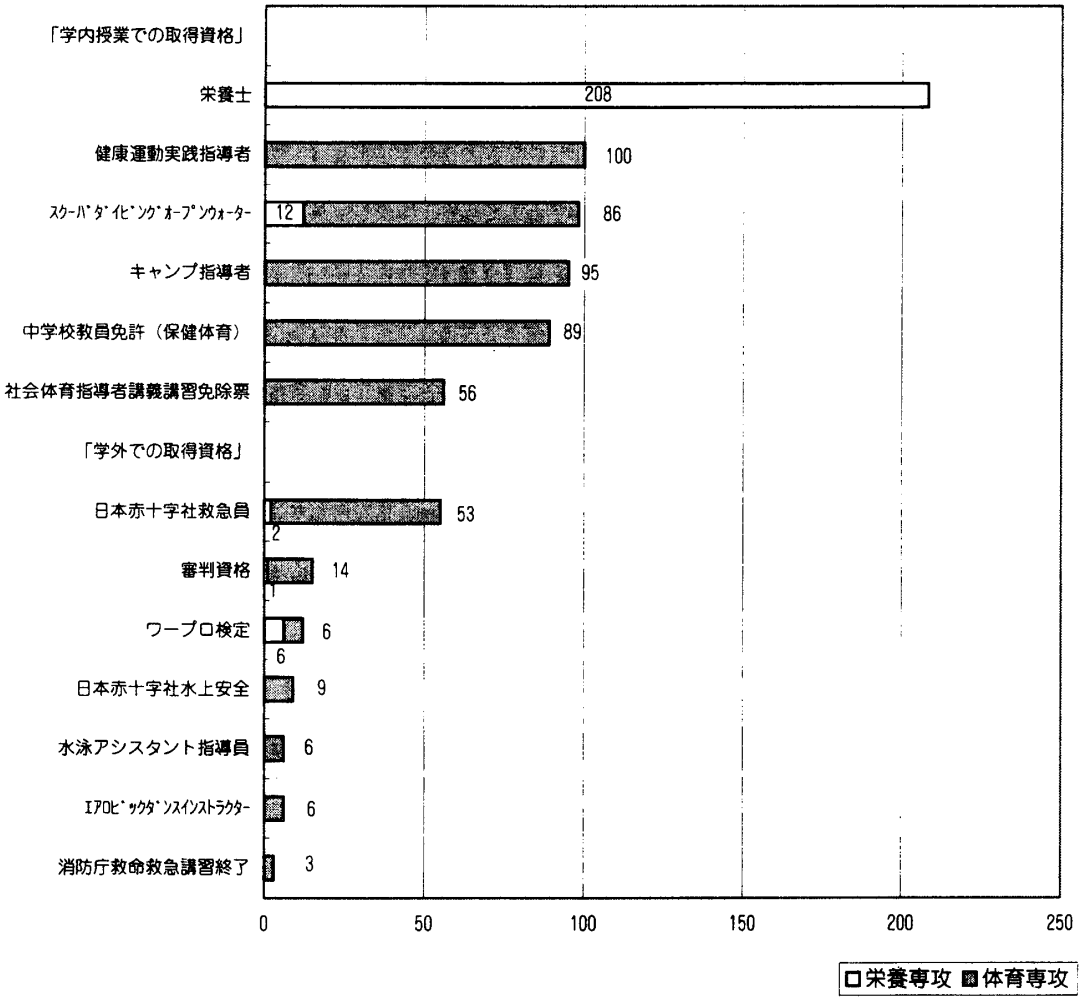

図３　在学中の取得資格

(3)　「学生生活を楽しむ」(82.4%)
(4)　「技術や技能が身に付く」(79.6%)
(5)　「体育スポーツについての知識が身に付く」(70.8%)
(6)　「やりたいことを見つける」(69.9%)

これからわかるのは１)「友人を作る」「学生生活を楽しむ」ことと２)「資格」や「技術や技能」などの専門的知識を学ぶことに対して期待をもって入学したということである。さらに３)「やりたいことを見つける」ことを短大の学生生活に期待する層の厚さに注目したい。

３)どのような資格を卒業までに取得したか（図―３）

「資格を取りたい」と希望していた学生達は当初の目標を達成することができたのであろうか。取得資格には学校の所定の単位を取得するととることが可能な資格と自主的に各自が学外で取得する資格がある。健康運動実践指導者とキャンプ指導者はほぼ40%，中学校教員免許（保健体育２種）は35%である。スクーバダイビングオープンウオーターに関しては栄養専攻の学生も取得していることに注目したい。

また学外で取得する資格で多いのは日本赤十字社救急員である。これは特にスポーツクラブへ就職希望する学生が意欲的にとっている傾向がある。

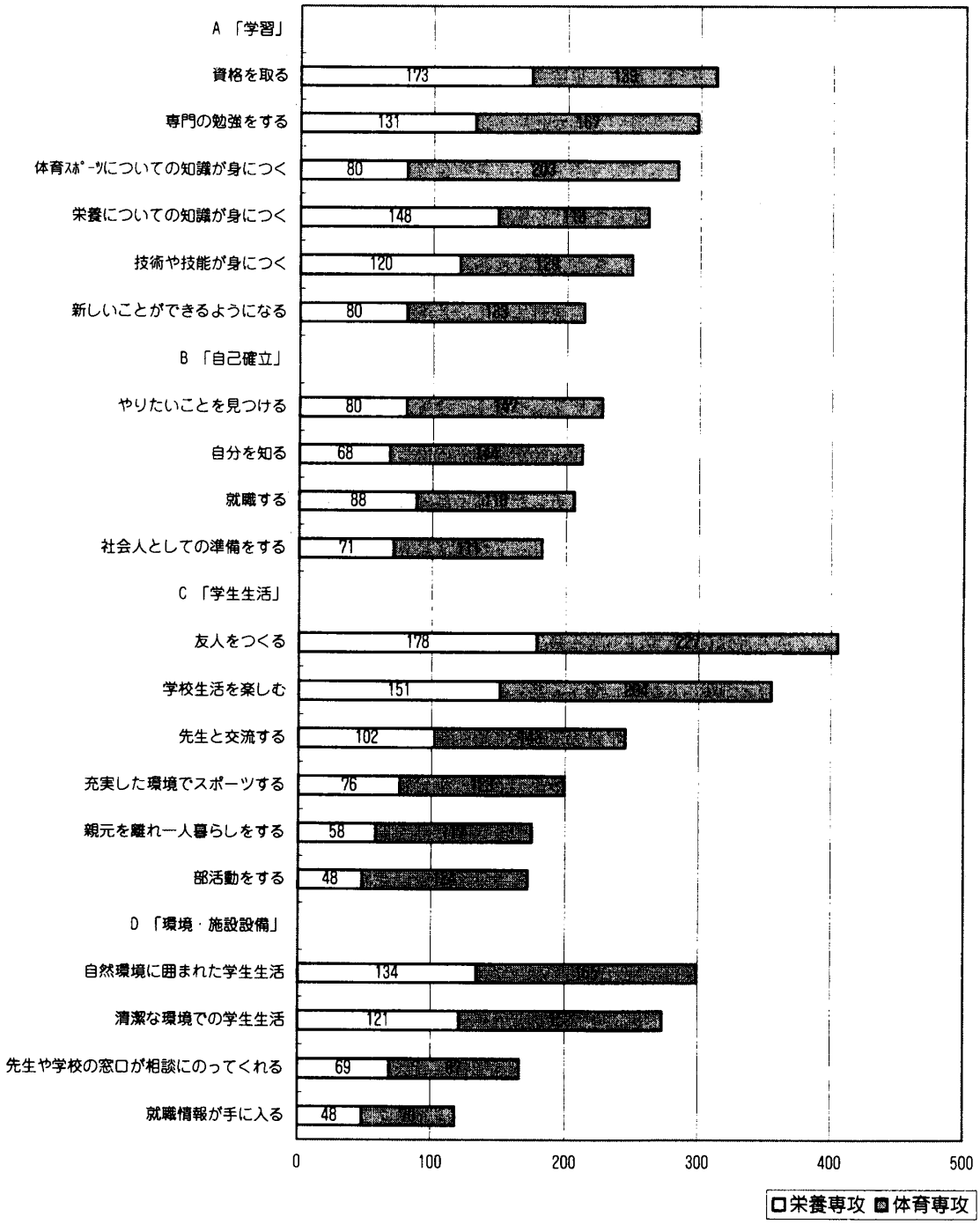

図4　学生生活の満足度(「やや」と「かなり」満足の合計　n=466)

4）学生生活で満足したことは何か（図―4）

すでに見たように「学習」と「学生生活」に対する満足度は一般に高いと言えるが何に満足しているのだろうか。4つのグループに分けて考えてみたい。

A　<学習>　入学時の学校に対する期待が「資格取得」にあったことと関連して，学生生活の満足は「資格を取る」(66.9%)，「専門の勉強をする」(63.9%)，「体育スポーツについての知識が身につく」(60.7%)，「栄養についての知識が身につく」(56%)，「技術や技能が身に

つく」(53.4%)，「新しいことができるようになる」(45.7%) の順である。特に資格を取得したことや専門について学んだことに対する満足は逆の面から見るとそれだけ専門的知識に対する期待の高さを窺わせる。

B ＜自己確立＞ 次に短大の機能としては高校までの自分をより高め，将来にわたってやりたいことを「発見」する事が重要な課題である。それらに関連して「やりたいことを見つける」(48.7%)，「自分を知る」(45.4%)，「就職をする」(44.2%)，「社会人としての準備をする」(39%) などが短大に期待されていることが示されている。

C ＜学生生活＞「友人をつくる」(86.9%)，「学生生活を楽しむ」(76.1%)，「先生と交流する」(52.5%)，「充実した環境でスポーツをする」(42.7%)，「部活動をする」(36.9%)。
友人に恵まれ，学生生活を楽しんだ卒業生が圧倒的に多いことが示されている。

D ＜環境・施設設備＞ 最後に学生生活を快適に過ごす上での環境の問題である。
「自然環境に恵まれた学生生活」(64.1%)，「清潔な環境での学生生活」(58.5%) と吉見の恵まれた自然環境と清潔な環境も学生生活の満足においては重要なファクターであることに気づかされる。「先生や窓口が相談にのってくれる」(35.6%)，「就職情報が手に入る」(25.3%) などソフト面では要望もある。これも逆の見方をすればそれだけ自然環境も含めた学習環境が学生生活にとって大きな位置を占めていると言うことに注目したい。

5)「よい学校でしたか」(図―5)，「よい学生生活でしたか」(図―6)について聞いた

「学校」については「かなりよい」「よい」で，あわせて81%，「学生生活」は同様に82%とほぼ同数である。これに対して「あまりよくない」は「学校」は3%，「学生生活」は7%となり学校よりも学生生活に対する「不満足」を示す者がや

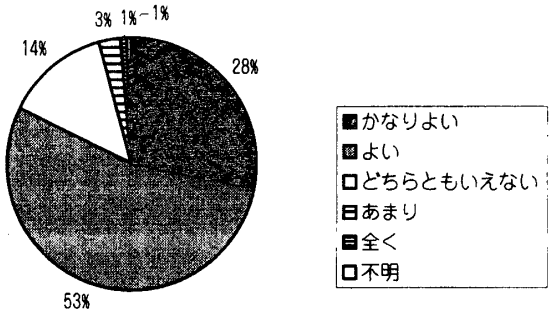

図5 良い学校だったか (n=466)

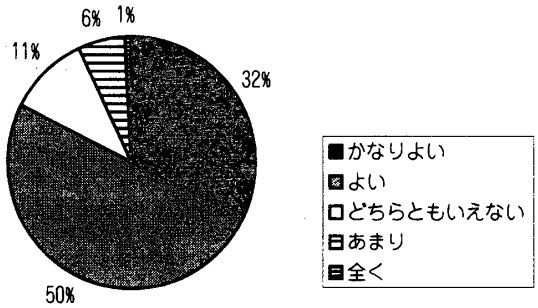

図6 良い学生生活だったか (n=466)

や多いことには注目したい。

3 若干の考察

以上見てきた卒業生のアンケート結果から私たちは何を読みとるかが課題となる。そこで今後の解析に向けていくつかの課題を出しておきたい。

1)入学当初の「期待」と卒業後の「満足」

図―4で見たように，卒業してからの満足度はそれだけで見るとかなりの高さを示している。今後の短大のあり方を考えるには当初の期待と比較してどのくらい満足が得られたのかについてはかることも重要な課題となる。そこでまず図―2と図―4を比べてみよう。
＜学習＞では「技術や技能が身につく」「新しいことができるようになる」などの項目の開きが大きい。＜学生生活＞では「先生と交流する」が期待の40.3%から52.5%と満足度の方が高くなっている。これは他の短大でも見られることであるが，小規模校であること実験・実習の時間が多く，それだけ助手も含めて学生と直接関わる教員スタッフが多いこと，担任制をとっていることなど様々

な要因が考えられる。<自己確立>の面では「やりたいことを見つける」ことでは十分に当初の期待にこたえていない面もあるが，「自分を知る」ことに対して短大が大きな役割を果たしたことが示されている。<環境・施設設備>では当初の期待を遙かに上回る満足が得られたことに注目したい。特に「自然環境」「清潔な環境」は入学時にはあまり期待していなかった事柄かもしれない。しかし2年間過ごす中でその環境の良さに気づくようになったのではなかろうか。

いうまでもないことであるが栄養専攻や体育専攻であっても「健康生活科」であることに誰もが自覚的であったということに注目したい。さらに栄養専攻，体育専攻いずれもスポーツと栄養の知識に対して関心が高いということも一つの特徴として言えるだろう。今後はこの点に関して学生達が「健康生活科」に対してどのようなイメージを持ち，具体的にはどんな課題・テーマの学習を期待しているのか，その際どのような学習形態が望ましいかなどについても詳細な分析が必要となるだろう。

また「一人暮らしをしたい」(2年間だけでも親元を離れて暮らしたい)，「自分のしたいことを見つける」など一人前の大人になる準備としての課題が短大2年間に課せられていることも示していると思われる。

2)文部省調査との比較

ところでこれらの結果はどの程度一般性があるのだろうか。「学生は短期大学をどう見ているか」(文部省「大学改革の今後の課題についての調査研究」平成7年1月，『わが国の文教政策　平成7年度 —新しい大学像を求めて— 進む高等教育の改革』平成8年2月，文部省編 p 81-88)と比較してみよう。

そこでは短期大学への入学目的は「免許や資格を取得するため」(48%)「社会人になったときすぐに役立つ知識・技術・技能を身につけるため」(38%)「専攻分野の学問を体系的に修得するため」(37.4%) が上位3位を占めている。このように専門的な知識と将来の仕事につながる「資格の取得」に入学目的が集中しているということである。これらに対して「人間性を養う」(16.6%)，「楽しい学生生活を送る」(13.2%) はやや低い。2年ないし3年という短期大学では「楽しい学生生活を送る」ことは後景に退いて，なによりも「資格だけでも」という目的に集中してしまうことを示しているのであろうか。

文部省の調査とすでに見た本学の卒業生の意識を比較すると「免許や資格」「専攻分野の学問」への期待という点では重なり合うが，「楽しい学生生活を送る」という項目では本学は特に高く，大きな開きがあることに注目したい。これは栄養専攻，体育専攻に関わらず「入学後もスポーツを続けたい」という意識を学生達が持ち続けることなどとも関連があるように思われ，興味深い結果である。学生生活を充実させる様々な要因を視野に入れた分析が必要な課題である。

3)まとめ

これらを総合して言えることは学生達は友達ができただけでは短大生活には満足しないということである。入学当初「遊ぶこと」に熱中した学生達が2年間の間に軌道修正しながら，自分を知り，やりたいことを見つけ，卒業していく。そのためには短大ではじめて新しいことができたり，資格の取得のために大変な思いをして格闘したり，さらに自分がしたいことを続けることができてはじめて満足を示すのである。

以上の事柄について今後，インタビュー調査や重点的な個別調査，あるいは高等学校に対する調査なども視野に入れて分析・考察を進めたい。

<謝　辞>

最後に仕事や育児に忙しい中，母校のために時間を割いてアンケートにご協力してくださった卒業生の方々に心からお礼を申し上げます。またアンケートの作成の予備調査のインタビュー調査にご協力くださった卒業生の方々，事務作業にご協力くださった方々に対して改めてお礼申し上げます。

参考文献

文部省編『わが国の文教政策　平成7年度—新し

い大学像を求めて―進む高等教育改革』平成8年2月刊
東京女子大学付属比較文化研究所「東京女子大学短期大学部卒業生の就業に関する意識調査」(1986年3月)

分担：蔵原三雪：調査結果の検討と本文作成
太田あや子：データ解析と調査結果の検討

この調査は特色ある教育研究（日本私立学校振興・共済事業団平成10年度私立大学等経常経費補助金特別補助）の助成交付を受けて実施した。